

八願)とその説相を同じうしている様であるが、いま、梵文悲華經 Karuṅgāpūṭīya)にあつては、相當早い時代に純大乘の思想をうけて淨土の上に一大改新を與へた「菩薩無數」の願事の特質をよく把握し、これを見失わないで正しく「臨終現前」の願に「菩薩衆圍繞 bodhisattva-gaṇa parivṛtāh)と明示してゐる點、單に「大衆圍繞」「無數衆圍繞」とのみ傳譯する漢譯二本よりも、更に一倍、阿彌陀佛の本願文を整理、改修、發展せしめてゐるものと考へたい。

教義と教化

雲村賢淳

『教行信證』の研究はその書誌學的研究が坂東本解體修理以來、頓に進歩して撰時論も漸く曙光を見出した如き感がある。即ち『教行信證』は聖人畢生の大著で、恐らく關東時代より歸洛御入滅まで、その間幾度も改綴増補され、寛元五年頃一應の完成を見たとは云へ、その後も常に座右に置いて加筆訂正され、依て眞筆本としては一本のみであらうと結論

されるに至つてゐる。而して撰述の意趣に承元の法難を起因とし、而もそれに内在する宗教的對決であつて、佛敎否宗教一般に對して一大批判を加へ、元祖相承の宗旨を鮮明にせんとするにあつたと考へられる。これに對して『淨土文類聚鈔』の撰時論は或は略前廣後説、又は廣前略後説等紛々として未だ解決を見ないけれども、これに關しては既に私見を發表したところである。そこに於いて撰述の意趣が最古寫本たる延慶寫本に傳持者名あるところより、當時の智識ある門弟に與へたものではないであらうかと言ふ立場から見れば、關東教團に於ける有念無念、一念多念の諍論、善慧の異義等、教團の動靜に對してそれを是正せんがために元祖の提擧に居して撰述されたものとせば、その撰時論も自ら明らかにするであらうことを言つた。

かくの如く廣・略二本の相違を撰述の意趣から見るとき、そこには教義の眞理性を鮮明ならしめんとする廣本に對して、略本は安心を傳へんとする意趣をもつて自己の信仰を直裁に述べられたものと見られる。古來、廣・略二本の相違を

教相と安心の關係に於いて論ぜられて來たが、撰述の意趣より見るとき、教義の鮮明と安心の傳達、即ち教義と教化の關係に於いてこれを把握することは出來ないであらうか。併し、教義に對して教化を論ぜんとなれば、略本より更に他の宗祖撰述の假名聖敎、就中、『唯信鈔文意』『一念多念文意』『未燈鈔』『御消息集』、加ふるに『嘆異鈔』に於ける宗祖の法語等廣く對照すれば、より明らかにするであらう。

由來、教義と教化は別立してあるものでなく、一宗教の両面であつて教義なき教化も、教化を豫想せざる教義も存在しないであらう。それ故、兩者は混然と溶融されてゐるものであるが、教義は教法の理論的構成であつて、その眞理性の開顯が問題であり、教化は教義の應用面であつて教法の機受に於ける安心が如何に傳授されるかが問題である。隨つて、教義を鮮明ならしめる場合と、安心傳授の教化の場合とは自ら異つた表現を取るであらう。即ち教義は他敎に對して自宗の眞理性をあらはすに相對的表現を取るであらうし、教化は卒直に自宗の行信を明

らかにする絶對的表現を取るであらう。この相對絶對の異は廣・略二本の上に最も明瞭に見らるゝところである。即ち、廣・略二本共に順逆兩觀の見方はあれど今はそれを省略して、大體を述べれば、廣本に於いては眞假相對で、三々法門は自ら確立し、要眞弘三門判の形を取つてゐる。これに對して略本はかゝる相對批判的なものは微塵もなく、偏へに如來廻向の法として教行二法門に居して述べた絶對的安心の表現である。然るに『唯信鈔文意』初め御消息等には時には相對的な教義表現を見るけれども、併し、そこにはあらはれるものは念佛往生の願として該攝門の立場を取つてゐる。故に『略本』初め『唯信文意』や『御消息』に至るこれ等の聖教は元祖の『選擇集』の提擧に従ひ教行二法門に居して行中攝信して、行信共に他力廻向なる旨をあらはし、ここにたとひ三法四法の開示はあつても三法四法共に他力廻向の旨を明すのであつて、たとひ相對しても元祖の念佛往生、宗祖の念佛成佛の法門で大體、行々相對、要弘二門判の表現をとつてゐる。かく見るとき、教義の開顯は相對批判、要

眞弘三門相對の形式、安心の表白、教化の立場は絶對的表現、要弘二門相對の形式を取つてゐることが知られる。

明治中葉以來、宗祖、蓮師兩師の化風に大いなる徑庭の差異ある如く考へられて來た。勿論差異あることも認められるが、併し、教化の立場に於ける安心の表現は必ずしも別のものではない。宗祖に於ける教行二法要弘二門の説述は全く蓮師に於いても『御文』『御一代記聞書』を見ると、「念佛まふさるべし」正雜分別にあつたことを諒解すれば、そこには徑庭の差異を認め得ないのである。

今や時代相應の教學、教化の振興を考究せらるべきときに當つて教化の基本を奈邊に求むべきかの問題に對して、宗祖も蓮師も共に四法を内在せる教行二法門に居して、行中攝信、要弘二門の立場を取られたことを深く反省し度いと思ふ。

註① 拙稿「淨土文類聚鈔の成立について」(『印度學佛教學研究』四卷一號、『親鸞聖人論說』第二號)

② 住田智見師論文「御再興の上人と申すこと」(『宗學研究』第十五號、『眞宗教學之研究』四六六頁)

インド佛教における 正・像二時の思想について

佐々木教悟

最近の學者の研究によると、インドの佛教にあつては、六世紀半頃に大集經が出現して来るまでは、正法とか像法とかの語はあつても、まさしくそのような言葉に對應する末法の語はなく、したがつて正像末の三時という一つの組織をもつて示される思想は見いだされないとせられる(山田龍城「末法思想について」印佛研四の二)。そこで今は主として、この正法 *saddhanna* と像法 *saddhanna-patirupaka* という言葉が、原始佛教から大乘佛教の初期にかけて、いかなる意味のもとに用いられてきているか、その點について若干の考察をして見たいと思ふ。

正法滅盡の思想は、すでに阿含の經典に現われているが(拙稿「法滅思想について」日佛年報、二二)、まさしく像法の語を用いて、それを正法の語に對比せしめて説くものは、相應部一八の一三(巴利第二卷、二二三―五頁、漢譯雜阿